

## 「日中植林・植樹国際連帯事業」2019年度中国大学生訪日団第2陣 参加者の感想（抜粋）

### 第1分団（1・2・3号車）

○環境・防災の視察では、日本人の防災意識が高いと感じた。突然の災害でも、すぐに自分自身を守る行動をとることができる。海岸にクロマツを植えて津波に備えるのも災害を未然に防ぐためのものである。海岸で植樹活動を行ったとき、単なる植樹と思っていたが、あとで津波などの自然災害防止のためと聞いて、意義が大きいと感じた。

○中国の防災教育のレベルをより高めなければと思った。四川の人々はわずか5年のうちに汶川大地震、雅安大地震という二度の大地震を経験したが、地震に関する防災教育は受けておらず、地震が起きた時に話題にするだけで、災害を防ぐという意識が足りない。また、地震後、四川にKIBOTCHAのような施設ができたという話もなく、災害に備える意識が欠けている。

○日本棋院と東北大学での交流が印象に残っている。日本棋院で日本の最高クラスの囲碁対局室を見学し、日本の名人の気分を味わい、2回の対局を通じて、日本の棋士の手ごわさを感じたこと、そして最後に台上で感想を発表したことが忘れられない。東北大学との交流は、3対3の対局だったのでリラックスできた。囲碁の方は充分満足とまではいかなかったが、東北大学の風景は、バスを降りた瞬間から帰りたくなるほど美しく、全員魅了された。今回の訪日は、楽しかっただけでなく、多くのことを学び、認識を新たにするようなものを見学した。今後の人生に変化を与えてくれる意義深いものであった。

○パラスポーツ運動会を体験したことで、障害者に対する見方や世界の見方が変わった。ナビゲーターが車いすで飛び回る様子を見て、生命のパワーを感じた。今後困難があっても、そんな前向きで負けない、楽観的にとらえる姿勢があれば、困難に立ち向かい、あきらめないパワーが生まれるだろう。

○1. 植樹活動に参加して、災害で破壊された故郷を緑化し、復旧させたことにとっても驚いた。大規模な復旧を行った広大な緑地を見て、まだこんな美しいところがあることが、とても嬉しかった。中国もこれを見習い、文化名跡を修復できればいいと思う。

2. KIBOTCHAの見学では、災害の状況を学び、被災前／最中／後の場面を見て辛かったが、災害発生後にいかに避難するかを学んだので、周りの人に伝え、一緒に学び、いざというときに備えたい。

3. 日本棋院と東北大学での囲碁交流では、施設を見学し、中村茂先生にお会いして対局したことが、とても楽しく、素晴らしい体験だった。今後は実際の対局にしる、ネットを通じてにしる、中日大学生の交流をもっと増やしてほしい。また、日本でも大学生の連珠が盛んになり、レベルアップすることを願っている。

4. 日本人家庭と間近で接し農家生活を体験したが、農家の環境は緑にあふれていて素晴らしく、空気が澄んでいて、農家の人々の生活も豊かで、幸せだと感じた。中国も農村の発展を図り、文化的素養を高めしてほしい。

○植樹活動に参加して、木の植え方を学んだ。これはとても意義のあることで、実際に経験してはじめて、1本の苗が空を突く大木に育つのがどんなに大変かわかるし、日常生活で紙を節約し、環境保護に努めるようになると思う。これは私たち一人ひとりの責任であり、義務である。素晴らしい生活は勝手にはやってこない、みんなが大切に保護し「先人が木を植え、後世の人が涼をとる」という奉仕の精神が必要で

ある。環境防災では、深く感銘を受けた。日本は地震、自然災害が多い国なので、この方面の豊富なノウハウを持っており、児童への教育も進んでいる。みんながある程度の対応能力、警戒意識を持つことが大事である。なぜなら、災害が発生し危険に直面したとき、冷静に、正確に対処し、怪我をすることなく、自分の命を守ってこそ、他の人を助けることができるからである。北京では地震が発生したことがないので、普段、防災は他人事だ。災害が本当に自分の身に降りかかったら、大きな代償を払わなければならないかもしれない。今すぐ気を引き締めなおし、防災応急処置教育に力を入れるべきだ。

○今回の交流では、今後の仕事や生活面で参考になることが多かった。環境防災では、自身の危機意識を高め、防災の実用的なテクニックや知識を多く学ぶ必要がある。植樹活動は、環境のためになるだけでなく、ある程度の津波抑止効果もあるので、中国の学校や職場で同じような活動を行うとよい。パラスポーツ運動会では、パラスポーツの大変さを体験し、障害者の苦労も理解できた。視覚や聴覚が遮断された感覚を体験するのは、障害者に関する活動を行ううえで、中国でも参考にできると思う。日本の全般的な感想として、日本人の温かさ、日本の環境のよさ、細部まで行き届いていること、人へのやさしさを感じた。

○パラスポーツ運動会の体験が印象深かった。中国では、障害者のことは避けたい話題で、マイノリティであり、パラスポーツを体験する機会はほとんどないので、障害者の気持ちをその立場に立って感じるができなかった。日本で今回、パラスポーツの大変さを感じる事ができた。大変だからこそ、彼らは懸命に努力して困難に打ち勝ち、自身の人生の価値を体現している。これこそ本当の平等だ。

ホームステイの夜も感じる事が多かった。日本には礼儀や細部に気を遣うことが染みついている。ホストファミリーの子供たちは、夜10時に塾から帰って、すぐ私たちとの交流に加わり、日常の出来事を話してくれたが、話を聞くと、まだご飯も食べてないことを知った。ホストファミリーのお母さんは、1階の廊下にミニライトを並べて、夜トイレに行くときに足元が見えるようにしてくれていた。日本人の心遣いは細部にまで現れていた。

○植樹活動で、自分で穴を掘って埋め戻し、木を植えたことが深く印象に残った。太平洋の潮風と高い波を自身で感じて、どうして植樹が必要なのかがより理解できた。KIBOTCHAを見学して、災害時のひもの結び方や解き方を学び、そこではやり方を教えてくれただけで、命の重要性については強調されなかったが、自分の命をもっと大切にしようと思った。

○植樹活動、環境防災の視察に参加して、日本が防災を重視していること、設備が整っており経験が豊富だと感じた。この未然に防ぐという精神は学ぶべきだと思う。仕事や生活において、自分の能力を高め、周囲の変化に注意し、いつ来るかわからない困難を用心すべきだ。中国に比べて、日本は地震、火山災害などが多い。ホームステイ先で、初めて地震を経験した。小さな地震でも、私にとっては一大事だったが、日本のファミリーの反応は全く違い、落ち着いていて、ちっとも気にしておらず、こんな小さな地震には慣れているようだった。中国の私の故郷では全く違う。自分の命を大切にしようと思ったし、ホストファミリーのおかげで幸せを感じた。

ホテルでも、ホームステイでも、一人ひとり個別の配膳が習慣のようだったが、中国では一卓で大勢と一緒に食べる。一番の違いは礼儀だ。会ったとき、別れるとき、食事の前後にもそれぞれ挨拶があって、人に会ったらお辞儀をする。また環境についても気をつけており、ごみは家に持ち帰って分類するため、街にはゴミ箱が見当たらない。細部まで考えられており、シートベルトの色やトイレの音姫などに人へのやさしさが表れていた。

日本の天気が素晴らしいことが、日本を好きな大きな理由だ。毎日部屋から外を眺めると、青い空、ふわふわの雲、多彩な光が視界に入ってきて、本当に美しい。日本の空を是非友達に薦めたい。それに、日

本料理はヘルシーだ。でも一番大事なのは日本のデザイン理念（人にやさしい）と職人精神だ。精神面の交流は、中国にとっても得るところが大きい。また日本に来たい。

○今回、つくば市リサイクルセンターを見学し、ゴミ処理の工程とごみの分類が環境に大きく貢献していることを学んだ。最も記憶に残っているのは植樹で、小さな苗が早く大木になって、しっかりした防護林になってほしいと思う。

筑波大学では、温かく迎えられ、球技の交流と夜の夕食交流会で距離が縮まった。東北大学の交流では、ダブルスでお互いの理解が深まり、楽しく卓球ができた。

## 第2分団（4・5号車）

○今回、中日の大学生代表が協力して植樹をすることができた。3校の代表4人でハナミズキを植えたことが忘れられない。日本は緑化面積が広く森も多いが、全員が植樹に参加できればよいと思った。

日本滞在2日目、上田壮一先生のSDGsに関するセミナーを拝聴し、感銘を受けた。多くのデザイナーが作品の形の美しさだけでなく、公共の利益に注目するようになっている。私個人の力でも社会の美しさに貢献したい。

芸術史の側面からみると、モダンアート以降は、前衛芸術は前衛的であるため、社会の思想に対して革新的であるが、実際に注目しているのは作品自体の思想性と前衛性であって、古典芸術のように形式やテクニックを追求し磨きをかけるというものではない。上田先生がいくつかの事例を挙げてくれたが、それらはすべて社会の底辺にいる人たちやマイノリティに注目している。日本にも中国にも貧困にあえぐ人が存在している。数年前に日本の都市で親子が餓死したという事件があったが、この先進国の現代社会で、そのようなことが起こっていると知って大変驚いた。人生は人のために。このような状況を聞けば、心を感じることはあるはずだが、行動するかどうかは個人が決めることだろう。

質疑応答で、上田先生は個人の力だけでは社会を変えるまでの大きな力にはならないが、やらずにはいられない、既存の制度の中での少しだけの修正であっても、それが個人ができる貢献だと正直に話してくれた。まだまだここには書き尽くせない思いがあるが、紙面の都合でここまでにしたい。

○今回の植樹活動や日本の各大学での芸術交流、視察を通じて、日本はエコロジーを大変重視していることを知った。彫刻学科の学生の彫刻用の木は自分で植えたもので、森で1本伐採すれば、また別の場所に1本植え、それを下級生が使用すると知った。これが日本ではすでに習慣になっていることに深く感銘を受けた。このようなことを見聞きして、私も日常生活で環境保護を実践したいと強く思った。しながわ防災体験館の体験でも、災害時の応急措置について理解を深めることができた。火事にあったら効果的に対処し、誰かが倒れたらどうやって応急措置すればいいかという興味深い知識は、普段の生活にもとても有益だ。東京都水の科学館でも面白い参加型のゲームや映像を見学して、浄水などについて学び、水資源の大切を理解した。1週間という短い期間だったが充実していた。エコに関する科学館を見学し、ホームステイでは日本人家庭の生活を味わい、食習慣や生活の様子を知り、日本の田舎暮らしを体験した。日本の環境衛生、また家庭文化やみんなが生活や仕事に前向きに頑張っている様子が一番印象に残っており、本当に感服した。どの家庭もきれいに掃除されており、気持ち良く、ゴミの分類や溶ける紙が備え付けられている快適なトイレを通じて、生活に対する新しい見方ができるようになった。今回の交流の経験を、中国での生活、各施設、エコ、SDGsなどの面で活かして、より良い社会環境を作るために微力ながら貢献したい。

○日本大学、名古屋芸術大学での交流で、アートクリエイティブについて知識を深めることができた。中国の

フレームや画板はほぼ既製品だが、日本の学生は木材を購入して、自分でフレームを制作していた。絵画の材料もアート作品の重要な一部分であると知った。日本の学生の創作方法も自由創作という手法で、スタートや方向性に各人の特徴があり、スタイルも多様だった。ホームステイでは、ホストファミリーが英語、詩、楽器などを学び続けており、趣味が多彩で、年を取っても学び続ける奥深さを痛切に感じた。一緒にお寺を見学した時、14世紀に建てられた建物だと聞いて、日本の古い建築物を大切に守るという意識や細部に感銘を受けた。小さな町でも家には抽象画や写真が飾ってあり、日本人の文化的素養が高いことに感心した。

○しながわ防災体験館で、日本では防災技術が一般の人に共有され、専門的に細かく学べるということを感じた。これは中国も学ぶべきだと思った。

印象に残ったことの一つは防災である。しながわ防災体験館の申し分のない体験学習コースだけでなく、滋賀県日野町でホームステイをした時にも、高齢の夫妻が交流方法を説明してくれた後、懐中電灯を出してきて、万一何かあったら懐中電灯を持って屋外の広い場所に逃げるよう説明してくれた。防災意識に表れる日本人の国民性と子供からお年寄りまで防災意識が高いことが印象深かった。中国ではまだ、防災意識が欠けているので、帰国したら周りの人に防災の基礎知識や訪日で学んだこと、感じたことを伝えようと思う。

○一番印象に残ったのは、日本大学の教育方法だ。私の学校では理論を教え、多人数クラスでの授業が多いが、専門施設はあまり充実していない。日本の大学は実際に手を動かすことに重きを置いており、1対1の授業もあり、専門施設が充実しており、学生の作業の完成度も高い。個人の意見だが、中国はそのまま設備と授業を充実させることはできないが、個人が勉強し、自分の経験を豊かにし、実践能力を高めることはできると思う。

○今回の交流で、日本の防災意識が生活に浸透していると感じた。至るところで目につくマークがあり、しっかり訓練を行っており、命を大切にしていることに感服した。「一期一会」の考え方が徐々に自分の中に入ってきて、これからの生活にもっと真剣に向き合おうと思った。

日本の街は、ゴミひとつなく整頓されており、ビルの間にも中国とは異なる秩序美があった。私はベジタリアンだが、それを知った日本のスタッフは毎回、日本食でも焼肉でも精進料理を用意してくれて本当に感動した。大変行き届いたもてなしで、マイノリティとして「きちんと見てくれている」というのはとても心地良かった。このような人を尊重する接し方をずっと心に刻んでおきたい。

日本の防災施設は、大変整っている。中国にもあるが形だけのもので、実用的なことを深く伝えることができているので、この分野では日本に学ぶことができる。

日野町のホームステイで、農村では日本の伝統的な生活スタイル、文化風俗が保たれていることを知った。それを素晴らしいと思い、驚いたと同時に、多くの日本の伝統文化が中国から伝わったにもかかわらず、現代の中国ではすでに失われていることを残念に思った。帰国後は、伝統文化を復興させて、自分たちの民族のルーツを探求することができればと思う。

日本大学と名古屋芸術大学を見学した際、学生はそんなに変わらないと思ったが、日本の学生が自分のアトリエを持ち、個展の準備をしているのに感心した。映像制作専攻の学校では、スタジオやライトもあって、プロの俳優までいるという教育設備や芸術的環境はとてもうらやましかった。人は環境の産物なので、中国の教育がより良くなることを願う。

○植樹活動の式典はとても素晴らしかった！もっと多くの人に参加できればさらに良かった！しながわ

防災体験館を見学し防災プログラムを体験したことで、とても有益な自助と共助の知識を学んだ。しながわ防災体験館のスタッフは根気よく説明してくれ、とても勉強になった。感謝している。

日本は災害の多い国だ。災害で多くの人を失った日本人は、災害を未然に防ぐため、過去の災害の経験から対処法を考え、実践している。学校では地震、消防訓練を行い、あらかじめ災害時の避難訓練もする。このように実践することで、机上の空論ではなく、本当に災害が起きた時、過去の経験を活かすことで亡くなる人を減らすことができる。中国の学校も重視すべきだと思う。

また、日本人はとても礼儀正しく、親切だ。知らない人にも頭を下げ、挨拶する。初めて来たゲストは自分の家のような温かさを感じるだろう。

大学生との交流がとても印象に残った。確かに少し壁はあったが、日本の学生独特の学習方法や雰囲気を感じることができた。異なる国にいるが、同じ専攻の学生同士通じ合うものがあった。中日の青少年は、互いに学び合い、ともに成長し、社会に恩返しするべきだ。

忘れられないのは、ホームステイだ。高齢の夫妻が伝統的な日本食作り、文化体験などを用意してくれ、たった1泊2日だったが、別れの際は本当に名残惜しかった。どうかお元気で！